

2021年4月11日 聖餐式説教

喜びの復活日より一週間が過ぎました。これからしばらくの間、私達は主イエスが人々の間に現われたことや、天国にお帰りになる前に弟子達に命じたいわゆる訣別説教、最後の説教について学びます。

さて、私はよく日曜学校の子供たちに復活って何だろうと問いかけることにしておりました。そうしますと多くの子供は、主イエスが十字架にかかって死んだのに、三日目に生き返ってみんなの前に現われたことだ、と言います。これは半分は正しい答えです。聖書は主イエスが確かに弟子たちや人々の間に姿を現されたと記しており、それは間違っではありません。しかし私達は復活とはそれだけでないこと、言い換えれば復活の本当の意味はそういうことではないことに心を向けてみたいと思います。

復活のもとの言葉を調べてみますと、死んでいたものが生き返る、すなわち蘇生するという言葉ではなく、起き上がる、という意味の言葉が使われています。主イエスは十字架にかかられてから三日目に蘇生したというのではなく、三日目に起き上がった、お墓の中に止まっはいなかった、死の中から起き上がった、人間の罪から起き上がったということなのです。そして弟子たちが主イエスの復活に与ったというのは、主イエスと一緒に起き上がった、主イエスの十字架によって陥った失意の中から起き上がった、主イエスと共にいた時の喜びが、勇気が再びよみがえってきたということなのです。聖書が伝える復活は、主イエスが蘇生したということではなく、主イエスを葬ろうとする人間の罪から主なる神が起き上がらせた、そして人々も落胆と失望のなかから起き上がったということなのです。さらに本日の福音書の箇所は、それが一部の人々だけではなくて、すべての人に、またそれぞれの人にあった方法で、しかも一度だけではなく、復活の喜びに与るまで何回も体験させてくださった、そして今後も私達が体験し続けるのだということを示しております。

ペトロとヨハネはお墓が空になっていたのを見て信じた、と書かれています。それは二人にとって大きな出来事であり、最初の復活の体験でした。しかしそれでもなお彼らの不安がすべてぬぐわれたのではありませんでした。その日の夕方には、二人は他の弟子たちと共に、ユダヤ人を恐れて隠れておりました。そこへ主イエスが現われて弟子たちは喜びました。この時に主イエスがおっしゃった「あなたがたに平和があるように」という挨拶は、私達が聖餐式の中で用いている「平和のあいさつ」と同じです。これで弟子たちは復活の主の証

人に全員がなつたはずでした。ところがたまたまその時にいなかったトマスは、私は信じないと言ひ張りました。この話しを聞くと私達は、トマスは情熱的であつたけれども大変疑い深い人間であると思ひます。しかし私達のうち誰が、トマスを責めることができるでしょうか。さらに重要なのは、主イエスはトマスにも、またトマスに一番合つた形で、ご自身を現されたことです。これでトマスも信じるものとなりました。弟子たちは特別に優秀だつたわけではなく、また特別に信仰深い人々だつたのでもありませんでした。空になつたお墓を見てもユダヤ人を恐れて隠れているような人々であり、他の弟子たちが主イエスに出会つたと言つても信じようとしない人々だつたのです。主イエスは何回も、それぞれの人に合つた仕方でご自身を現され、復活への喜びに招かれたのでした。そして眞実は見えない。私達の信じる主なる神は、目に見えなくては手で触れなくてはということでは正しく捉えられないことが示されております。

ペトロはヨハネたちと共に、その後エルサレムから百キロメートル以上離れた故郷のガリラヤへ行き、漁師に戻つていました。恐ろしくてエルサレムには止まつていられなかつたのです。主イエスとの出会いを何かも果たしていながらこういう弟子たちだつたのです。その日一晩中働きましたが何も取れませんでした。そこへ主イエスが現われ、漁場を教えると多くの魚が取れました。ペトロは、これが主イエスに最初に出会つた時と全く同じであつたのに気づき、再び復活の喜びに出会うことが出来たのでした。

復活の喜びは一部の人だけのものではなく、全ての人のもものに与えられ、またその人にふさわしい形で、しかも一回だけではなく何回も与えられた。聖書はそう語つてゐるのです。私達の中に復活の主が臨まれるというのはそういうことであり、私達もまた、毎週の聖餐式の中で、復活の主に出会つて起き上がられるのです。

私達がささげております聖餐式の最初の言葉を思い起こして終わりたいと思ひます。

主イエスキリストよ、おいでください。

弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を現されたように、私達のうちにもお臨みください。

復活の主が全ての人に宿り、その喜びで満たされますように…